シリーズ5年上第15回・くわしい解説

目　次

基本第11回	1	…p.2
	2	…p.3
基本第12回	3	…p.4
	4	…p.6
基本第13回	5	…p.7
	6	…p.9
	7	…p.9
基本第14回	8	…p.10
	9	…p.11
練習	1	…p.12
練習	2	…p.13
練習	3	…p.14
練習	4	…p.16
練習	5	…p.17

すぐる学習会
http://www.suguru.jp

第 11 回・基本 1

(1)　さいころの目は６までなので，大小２つのさいころの目の積は，最大で 6×6＝36 です。

よって，大小２つのさいころの目の積が 10 の倍数になるのは，積が 10，20，30 のいずれかです。

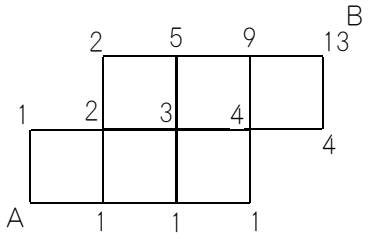
積が 10 になるのは，(大，小)＝(2，5) と (5，2) の２通りです。

積が 20 になるのは，(大，小)＝(4，5) と (5，4) の２通りです。

積が 30 になるのは，(大，小)＝(5，6) と (6，5) の２通りです。

全部で，2＋2＋2＝6(通り)あります。

(2)　右の図のようになり，答えは 13 通りです。



まちがった人は，どこの交差点の数をまちがえたのか，きちんと点検しましょう。

(3)　ＡからＢまでは４通りの道があり，ＢからＣまでは５通りの道があるので，ＡからＢを通ってＣまでの道順は，4×5＝20(通り)あります。

(4)　右の図のような４つの場所があったとします。

A	B	C	D

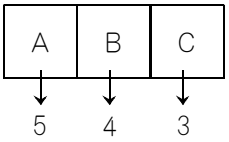
Ａの場所のすわり方は，４人の中から１人選ぶので，４通りです。

Ｂの場所のすわり方は，Ａにすわっていない３人の中から１人選ぶので，３通りです。

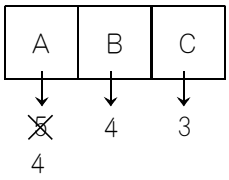
同じようにして，Ｃのすわり方は２通り，Ｄのすわり方は１通りですから，全部で，4×3×2×1＝24(通り)です。

第 11 回・基本 2

(1)　右の図のように，百の位をＡ，十の位をＢ，一の位をＣとします。
　百の位は５枚のカードの中から１枚選ぶので５通り，十の位は残った４枚のカードの中から１枚選ぶので４通り，一の位は残った３枚のカードの中から１枚選ぶので３通りとすると，5×4×3 の計算をすれば，答えを求めることができそうですが，



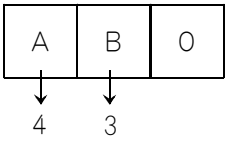
　百の位だけは，0 のカードを使えないので５通りではなく４通りになります。



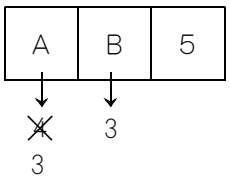
　全部で，4×4×3＝ 48(通り)になります。

(2)　５の倍数になるためには，一の位が０か５になる必要があります。

　一の位が 0 の場合は，右の図のようになり，0 は使ってしまったので百の位は残り４通り，十の位は３通りの選び方がありますから，4×3＝ 12(通り)です。
　(百の位に 0 を使うことはありません。一の位に 0 を使ってしまっているからです。)



　一の位が 5 の場合は，右の図のようになり，百の位は残り４通り，十の位は３通りの選び方がありますが，百の位だけは，0 のカードは使えないので４通りではなく３通りになります。
　3×3＝ 9(通り)です。



　よって，一の位が 0 の場合は 12 通り，一の位が 5 の場合は９通りですから，全部で，12＋9＝ 21 (通り)です。

第 12 回・基本 3

(1)　「５個中２個」という計算で求めることはできません。(同じものがある場合はムリ。)

10 円玉１枚，100 円玉２枚，500 円玉２枚から２枚を選ぶ組合せは，
(10，100)，(10，500)，(100，100)，(100，500)，(500，500) の 5 通りあります。

(2)　リンゴ，ミカン，イチゴ，メロンの４個の中から２個を選ぶのですから，「４個中２個」という考え方で，求めることができます。

$\frac{4\times3}{2\times1}$ ＝ 6 (通り)の組み合わせがあります。

(3)　７人の中から３人を選ぶのですから，「７人中３人」という考え方で求めることができます。

$\frac{7\times6\times5}{3\times2\times1}$ ＝ 35 (通り)の組み合わせがあります。

(4)　まず，班長の選び方は，６人の中から１人を選ぶので，６通りです。

班長を選んだら，あと５人が残っています。

副班長は，５人の中から２人を選ぶので，「５人中２人」という考え方で求めることができます。

$\frac{5\times4}{2\times1}$ ＝ 10 (通り)の組み合わせがあります。

班長の６通りの選び方それぞれに対して，副班長の選び方は 10 通りずつあるので，全部で 6×10＝ 60 (通り)の選び方があります。

(5)　右の図のマスの中に，☆，☆，☆，◇，◇，◇を入れることにします。

６個のマスの中の３個を選んで☆を入れたら，◇は空いている３個のマスに入れることになります。

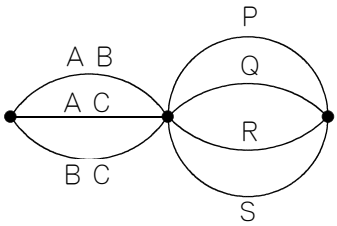
よって，６個のマスの中のどの３個を選ぶか，という問題になり，「６個中３個」という考え方です。

$\frac{6\times5\times4}{3\times2\times1}$ ＝ 20(通り)の並べ方があります。

(6)　男子の選び方は，「３人中２人」ですから，「３人中，選ばない１人を決める」のように考えて，「３人中１人」となり，３通りあります。

女子の選び方は，「4人中1人」ですから，4通りあります。

右の図のような道の通り方と同じなので，全部で，
3×4＝ 12(通り)です。



(7)　「各位の数字の和が９の倍数なら，その数は９の倍数」という知識を利用します。

５けたの整数「２□４１６」のうち，□以外の和は，2＋4＋1＋6＝13 です。

よって９の倍数になるためには，
□＋13＝９　→　引けないのでムリ
□＋13＝ 18 →　□＝ 18－13＝ 5
□＋13＝ 27 →　□＝ 27－13＝ 14 となり，ムリ

□は 5 であることがわかりました。

第 12 回・基本 4

(1)　サッカーの試合は，たとえば「フロンターレ対マリノス対フリューゲルス」のような，3 チームで試合をすることはありません。
　必ず，「フロンターレ対マリノス」のように，2 チームで試合をすることになります。

いま，サッカーに 16 チームが参加したそうです。
ですから，16 チームの中から，2 チームを選んで試合をすることになります。
その 2 チームの選び方が，何通りあるか，という問題になります。

つまり，「16 個中 2 個を選ぶ」という場合の数を求めることになります。
$\frac{16\times15}{2\times1}$ ＝ 120(試合)あります。

(2)　トーナメント戦というのは勝ち抜き戦ともいいます。

1 回負けたらもうそこで終わり，という試合方法です。

1 試合やったら，必ず 1 チームが勝ち，1 チームが負けます。

もし，10 試合やったら，10 チームが勝ち，10 チームが負けます。

負けチームに注目すると，もし 5 試合やったら，5 チームが負けます。

逆にもし 7 チームが負けたとしたら，7 試合やったことになります。

ところでトーナメント戦の場合，優勝チームは 1 回も負けていません。

優勝チーム以外のチームは，はじめの試合で負けるにしろ，優勝を決める決勝戦で負けるにしろ，必ずどこかで負けています。

たとえば 9 チームがトーナメント戦をしたら，優勝チーム以外の 8 チームは，どこかで負けているのです。つまり，9 チームでトーナメント戦をしたら，8 チームがどこかで負けたことになりますから，8 試合やったことになります。

この問題の場合は，16 チームでトーナメント戦をしたのですから，15 チームがどこかで負けたことになりますから，15 試合やったことになります。

注意　ようするにトーナメント戦の場合，「試合数＝チーム数－1」になります。

第 13 回・基本 5

(1)　分速 50 m とは，1 分間に 50 m 進む速さのことです。

2 時間 20 分＝(60×2＋20) 分＝ 140 分ですから，50×140＝ 7000(m)進みます。

1 km＝ 1000 m ですから，7000 m ＝ 7 kmです。

(2)　時速 12 km＝ 1 時間に 12 km＝ 60 分で 12000 m ＝ 1 分で 12000÷60＝ 200(m)進みます。

5 km＝ 5000 m を 1 分で 200 m ずつ進むと，5000÷200＝ 25(分)かかります。

別解　時速 12 kmで 5 kmを進むと，$5 \div 12 = \frac{5}{12}$(時間)かかります。
1 時間＝ 60 分ですから，$\frac{5}{12} \times 60 = 25$(分)になります。

(3)　24 分で 4 km進むのですから，「分」も「km」も 4 で割って，
24÷4＝ 6(分)で 4÷4＝ 1(km)進みます。

時速というのは 1 時間＝ 60 分あたりのことですから，6 分の，60÷6＝ 10(倍)です。

よって進んだ道のりも 10 倍になり，1×10＝ 10(km)進みます。

よって，時速 10 kmになります。

別解　24 分で 4 kmですから，分速，$4 \div 24 = \frac{4}{24} = \frac{1}{6}$(km)です。
時速にすると，$\frac{1}{6} \times 60 = 10$(km)です。

別解　24 分を時間の単位にすると，24÷60＝ 0.4(時間)です。

よって，0.4 時間で 4 kmを進んだのですから，時速 4÷0.4＝ 10(km)です。

(次のページへ)

(4)　はじめの 1200 m は分速 40 m で歩いたのですから，1200÷40＝ 30(分)かかります。

残りの 1500 m は分速 100 m で走ったのですから，1500÷100＝ 15(分)かかります。

全部で 30＋15＝ 45(分)で，1200＋1500＝ 2700(m)を進みました。

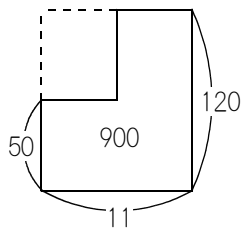
よって全体の平均の分速は，2700÷45＝ 60(m)です。

(5)　次のような問題と同じです。

「1 本 50 円のえんぴつと 1 本 120 円のボールペンがあります。合わせて 11 本買ったところ，900 円になりました。

この問題は，「つるかめ算」です。

右のような面積図になります。



点線部分の面積は，120×11－900＝ 420 です。

点線部分のたての長さは 120－50＝ 70 ですから，横の長さは，420÷70＝ 6 です。

よって，分速 50 m で 6 分歩き，分速 120 m で 11－6＝ 5(分)走ったことになります。

第 13 回・基本 6

(1)　1.8 km＝ 1800 m です。

行きは 1800 m を分速 200 m で走ったのですから，1800÷200＝ 9(分)かかりました。

帰りは 1800 m を分速 300 m で走ったのですから，1800÷300＝ 6(分)かかりました。

往復で，9＋6＝ 15(分)かかりました。

(2)　片道は 1800 m ですから，往復の道のりは，1800×2＝ 3600(m)です。

(1)で，往復にかかった時間は 15 分であることがわかっています。

よって，15 分で，3600 m を往復したことになります。

往復の平均の分速は，3600÷15＝ 240(m)になります。

第 13 回・基本 7

(1)　ひろと君は，15 分で 900 m をもどってきたのですから，ひろと君の分速は，
900÷15＝ 60(m)です。

(2)　ひろと君は，0 分のときは 900 m のところにいました。

x 分のときは，360 m のところにいます。

x 分で，900－360＝ 540(m)を進みました。

(1)で，ひろと君の分速は 60 m であることがわかっています。

よって x は，540÷60＝ 9 です。

注意　360÷60＝ 6 とするミスが多いです。注意しましょう。

第 14 回・基本 8

(1)　1 L ＝ 1000 cm^3ですから，2.1 L ＝ 2100 cm^3です。

水の深さを□cmとすると，10×15×□＝ 2100 ですから，□＝2100÷(10×15)＝ 14 (cm)です。

(2)　「水の体積＝底面積×水の深さ」で，底面積は 350 cm^2，水の深さは 12 cmですから，水の体積は，350×12＝ 4200 (cm^3)です。

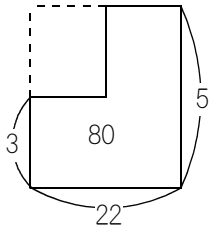
ところで，1 dL ＝ 100 cm^3ですから，6 dL ＝ 600 cm^3です。

よって，1 分間に 600 cm^3ずつ水を入れると，水の体積が 4200 cm^3になるのは何分後かを求めることになります。

4200÷600＝ 7 (分後)になります。

(3)　はじめは毎分 3 dL ＝ 1 分間に 3 dL ずつ，途中からは毎分 5 dL ＝ 1 分間に 5 dL ずつ水を入れて，22 分で 8 L ＝ 80 dL になるのですから，この問題は「つるかめ算」です。

右のような面積図になります。



点線部分の面積は，5×22－80＝ 30 です。

点線部分のたての長さは 5－3＝ 2 ですから，横の長さは，30÷2＝ 15 です。

よって，毎分 3 dL ずつ水を入れたのは 15 分です。

(4)　「左はしの水の深さ」と「右はしの水の深さ」の和が変わらないことを利用します。

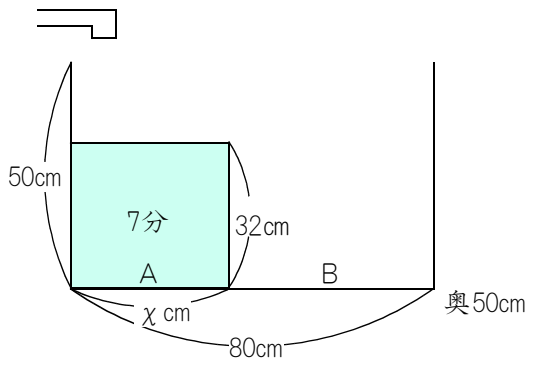
(図 1)では，「左はしの水の深さ」と「右はしの水の深さ」の和は，8＋8＝ 16 (cm)です。

よって，(図 2)の「左はしの水の深さ」と「右はしの水の深さ」の和も，16 cmになります。

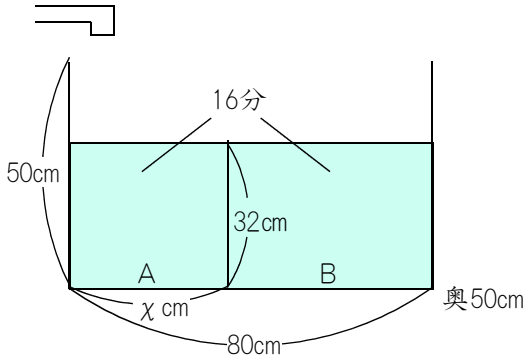
(図 2)の右はしの水の深さは 11 cmですから，左はしの水の深さである x は，16－11＝ 5 (cm)です。

第 14 回・基本 9

(1)　グラフによって，Ａの仕切り板まで水が入るのに，7分かかることがわかります。



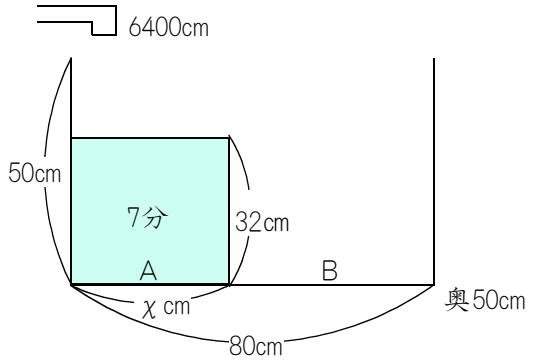
仕切り板の高さが32㎝であることも，わかります。
しかし，7分間に入った水の量はわかりません。



また，グラフによって，ＡとＢの両方に仕切り板の高さまで水が入るのに，16分かかることもわかります。

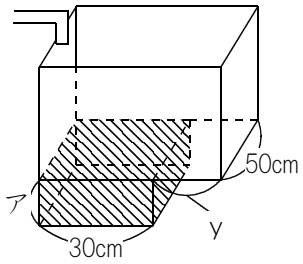
16分で入ったのは，横が80㎝，高さが32㎝，奥まで40㎝の部分です。
16分で入った水の体積は，
80 × 32 × 50 ＝ 128000(㎤)です。
1分あたり，128000 ÷ 16＝ 8000（㎤）ずつ，水が入ることになります。
1 L ＝ 1000㎤ ですから，毎分8 L ずつ，水を入れたことになります。

(2)　(1)で，水は毎分8000㎤ずつ入ることがわかりました。
右の図は，7分後の状態です。
7分間で，8000 × 7 ＝ 56000（㎤）の水が入りました。
よって，32 × χ × 50 ＝ 56000　となりますから，
χ ＝ 56000 ÷ (32 × 50) ＝ 35（㎝）になります。



練習 1

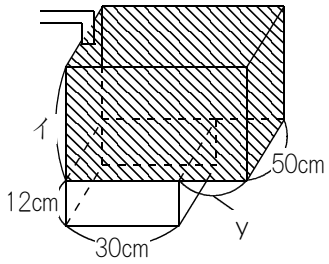
(1)　右の図のアの長さは，(図２)のグラフを見ると 12 cmであることがわかります。



右の図の斜線部分の体積は，50×30×12＝ 18000 (cm³)です。

(図２)のグラフの x 分のときの体積が 18000 cm³で，毎分６Ｌ＝ 6000 cm³の割合で水を入れたのですから，x ＝ 18000÷6000＝ 3 (分)です。

(2)　(1)で，x は 3 であることがわかりました。
よって，右の図の斜線部分に水が入るのは，(図２)を見ると，3 分後から 15 分後までの，15－3＝ 12 (分間)です。。



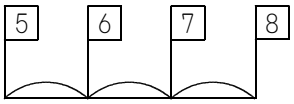
毎分６Ｌ＝ 6000 cm³の割合で水を入れたのですから，右の図の斜線部分の体積は，6000×12＝ 72000 (cm³)です。

右の図のイの長さは，(図２)のグラフを見ると，42－12＝ 30 (cm)であることがわかります。

斜線部分の高さはイなので 30 cm，奥までは 50 cmですから，横の長さを□cmとすると，30×50×□＝ 72000　です。

よって，□＝ 72000÷(30×50)＝ 48 (cm)ですから，y は，48－30＝ 18 (cm)です。

練習 2



(1)　右の図のように，たとえば５番の旗から８番の旗までのかんかくは，8－5＝ 3(個)あります。
　植木算のように，1 を足したり引いたりする必要がないことに注意しましょう。

　この問題の場合は，5 番の旗から 17 番の旗までですから，17－5＝ 12(個)のかんかくがあります。

　1 個のかんかくは 8 m ですから，12 個のかんかくは，8×12＝ 96(m)です。

　よって太郎君は 1 周目に，16 秒で 96 m を走ったことになりますから，1 周目の太郎君の秒速は，96÷16＝ 6(m)です。

(2)　太郎君は 1 周目を走り終えるのに，2 分＝ 120 秒かかりました。

　(1)で求めた通り，1 周目の太郎君の秒速は 6 m でした。

　よってこのコースは，6×120＝ 720(m)です。

　また，旗は 8 m おきに立っていて，旗の本数は 720÷8＝ 90(本)です。

注意　まわりに旗を立てるときには，「＋１」や「－１」をする必要はありません。

(3)　2 周目は，10 番の旗からから 37 番の旗までの，37－10＝ 27(個)のかんかくを走るのに，24 秒かかりました。
　1 個のかんかくは 8 m ですから，27 個のかんかくでは，8×27＝ 216(m)です。
　よって 2 周目は，24 秒で 216 m を走ったのですから，秒速 216÷24＝ 9(m)です。

　コース 1 周は，(2)で求めた通り 720 m なので，2 周目は，720÷9＝ 80(秒)かかります。

　1 周目は，問題に書いてある通り 2 分＝ 120 秒かかったので，2 周合わせて，80＋120＝ 200(秒)かかりました。

　コースを 2 周すると 720×2＝ 1440(m)になりますから，2 周したときの平均の秒速は，1440÷200＝ 7.2(m)になります。

練習 $\boxed{3}$ (1)

４の倍数になるためには，「下２ケタが４の倍数であること」が条件です。

まず偶数でないと４の倍数にならないので，一の位は０か２か４です。

よって，□□$\boxed{0}$か，□□$\boxed{2}$か，□□$\boxed{4}$のいずれかです。

□□$\boxed{0}$の場合，残っているカードは$\boxed{1}\boxed{2}\boxed{4}\boxed{7}$なので，下２ケタが４の倍数になるためには，□$\boxed{2}\boxed{0}$か，□$\boxed{4}\boxed{0}$のどちらかのみです。

□□$\boxed{2}$の場合，残っているカードは$\boxed{0}\boxed{1}\boxed{4}\boxed{7}$なので，下２ケタが４の倍数になるためには，□$\boxed{1}\boxed{2}$か，□$\boxed{7}\boxed{2}$のどちらかのみです。

□□$\boxed{4}$の場合，残っているカードは$\boxed{0}\boxed{1}\boxed{2}\boxed{7}$なので，下２ケタが４の倍数になるためには，□$\boxed{0}\boxed{4}$か，□$\boxed{2}\boxed{4}$のどちらかのみです。

結局４の倍数になるのは，□$\boxed{2}\boxed{0}$，□$\boxed{4}\boxed{0}$，□$\boxed{1}\boxed{2}$，□$\boxed{7}\boxed{2}$，□$\boxed{0}\boxed{4}$，□$\boxed{2}\boxed{4}$の６パターンのいずれかです。

この６パターンを，$\boxed{0}$が入っている□$\boxed{2}\boxed{0}$・□$\boxed{4}\boxed{0}$・□$\boxed{0}\boxed{4}$のグループと，$\boxed{0}$が入っていない□$\boxed{1}\boxed{2}$・□$\boxed{7}\boxed{2}$・□$\boxed{2}\boxed{4}$のグループに分けます。

$\boxed{0}$が入っている□$\boxed{2}\boxed{0}$・□$\boxed{4}\boxed{0}$・□$\boxed{0}\boxed{4}$のグループ場合は，百の位には残っているカードをどれでも使えますから，たとえば□$\boxed{2}\boxed{0}$なら$\boxed{1}\boxed{2}\boxed{0}$・$\boxed{4}\boxed{2}\boxed{0}$・$\boxed{7}\boxed{2}\boxed{0}$となるように３通りずつできますから，３×３＝９(通り)の４の倍数ができます。

$\boxed{0}$が入っていない□$\boxed{1}\boxed{2}$・□$\boxed{7}\boxed{2}$・□$\boxed{2}\boxed{4}$のグループ場合は，百の位には残っているカードのうち$\boxed{0}$を使ってはいけないので，□$\boxed{1}\boxed{2}$なら$\boxed{4}\boxed{1}\boxed{2}$・$\boxed{7}\boxed{1}\boxed{2}$となるように２通りずつできますから，２×３＝６(通り)の４の倍数ができます。

したがって，全部で ９＋６＝ 15(通り)の４の倍数ができます。

練習 $\boxed{3}$ (2)

３の倍数になるためには，「各位の和が３の倍数になること」が条件です。

たとえば，「123」は，各位の和が１＋２＋３＝６ですから３の倍数ですが，「132」「213」「231」「312」「321」も，各位の和を計算しなくても３の倍数です。なぜなら，並べ替えただけで，各位の和は６のまま変わらないからです。

よって，「123」「132」「213」「231」「312」「321」の代表として「123」だけを採用し，並び替えるのはあとまわしにします。

同じように考えて，$\boxed{0}$，$\boxed{1}$，$\boxed{2}$，$\boxed{4}$，$\boxed{7}$ から３枚選び出して，３の倍数になるような代表を探し出しましょう。

$\boxed{0}\boxed{1}\boxed{2}$，$\boxed{0}\boxed{2}\boxed{4}$，$\boxed{0}\boxed{2}\boxed{7}$，$\boxed{1}\boxed{4}\boxed{7}$ の場合に，各位の和が３の倍数になります。

$\boxed{0}\boxed{1}\boxed{2}$ のように $\boxed{0}$ がふくまれている場合は並び替えると「102」「120」「201」「210」のように，４通りの整数ができます。

$\boxed{0}\boxed{1}\boxed{2}$ の場合も４通り，$\boxed{0}\boxed{2}\boxed{7}$ の場合も４通りあります。

$\boxed{1}\boxed{4}\boxed{7}$ の場合は $\boxed{0}$ がふくまれていないので，「147」「174」「417」「471」「714」「741」の６通りの整数ができます。

全部で，４×３＋６＝ 18(通り)の３の倍数ができました。

練習 4

４色をすべて使うのですが，５つの部分がありますから，どこか２つの部分を同じ色にしなければなりません。

となり合う部分が同じ色にならないようにするのですから，くっついている２つの部分を同じ色にするわけにはいきません。

アとオ，イとエ，イとオははなれている部分なので，同じ色にしても大丈夫です。

アとオを同じ色にする場合，オの色については考える必要がありません。なぜなら，アにぬる色を決めたとたん，オにも同じ色をぬることになるからです。
よって，アとオを同じ色にする場合は，ア・イ・ウ・エの４つの部分のぬり分けだけを考えることになります。
アの色のぬり方は４色のうちどれかなので４通り。
イの色のぬり方は残り３色から選ぶので３通り。
同じように考えて，ウは２通りで，エは１通りです。
よって，4×3×2×1＝24(通り)のぬり分け方があります。

イとエを同じ色にする場合も，イとオを同じ色にする場合も，同様にして24通りのぬり分け方があります。

全部で，24×3＝72(通り)になります。

練習 5

ＡとＢの容器の中にも水が入ることを注意しましょう。

(1)　途中どのように水が入っていくかを全く無視して，最後にどうなったかを考えます。

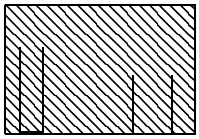
グラフを見ると，18 分たったときに，水面の高さが 60 cmになっています。

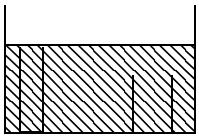
よって 18 分のときに，この直方体全体に水が入りました。

直方体全体の容積は，30×40×60＝ 72000 (cm^3)です。

18 分で 72000 cm^{3}の水が入るのですから，毎分 72000÷18＝ 4000 (cm^3) → 4Ｌの水が入ります。

(2)　18 分のときに，直方体の容器全体に水が入ります。

18 分のときは  のように水が入っていますが，少しずつ時間をもどしていくと，12 分のときに(図２)のグラフが折れ曲がっています。

12 分のときには，  のように，Ａの容器の高さぶんまで水が入っていました。

(1)で，水は 1 分間に 4000 cm^{3}ずつ入ることがわかっています。

よって 12 分間で，4000×12＝ 48000 (cm^3)の水が入っています。

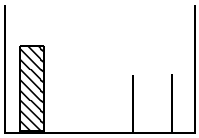
直方体の容器の底面積は 30×40＝ 1200 (cm^2)です。

よってＡの容器の高さは，48000÷1200＝ 40 (cm)です。

(次のページへ)

(3)　(図２)のグラフを見ると，はじめから２分後までは水面の高さは変わっていません。

なぜなら，(図２)のグラフはコップの外側の水面の高さのグラフなので，はじめから２分後までは，コップの外側には水があふれることがなく，Ａのコップだけに水が入っていたことになります。

よって，２分後には  のように水が入っていたことになります。

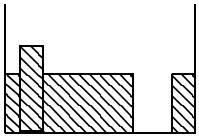
(1)で，１分間に 4000 cm³ずつ水が入ることがわかっています。

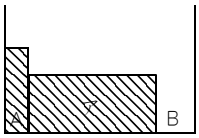
２分間では，4000×2＝8000(cm³)の水が入りますから，Ａの容積は 8000 cm³です。

(2)で，Ａの高さは 40 cmであることがわかっています。

よってＡの底面積は，8000÷40＝ 200 (cm²)です。…(★)

(図２)を見ると，５分後には水面の高さは 20 cmになって，グラフが折れ曲がっています。

よって５分後は  のようになっています。

見やすくするためにＡとＢのコップを，直方体の容器の左はしと右はしにくっつけると， 

となります。

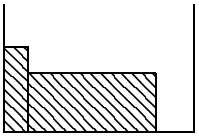
Ａの部分は２分で入ったので，アの部分は 5－2＝ 3(分)で入ります。

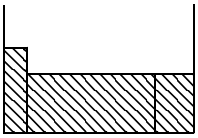
１分あたり 4000 cm³ずつ入りますから，３分で 4000×3＝ 12000 (cm³)です。

アの部分の高さは 20 cmですから，アの部分の底面積は，12000÷20＝ 600 (cm²)です。

Ａの底面積は(★)によって 200 cm²，アの部分の底面積は 600 cm²，直方体の容器の底面積は 30×40＝ 1200 (cm²)ですから，Ｂの底面積は 1200－(200＋600)＝ 400 (cm²)です。

(次のページへ)

(4)　(3)で，はじめから５分後には，  のように水が入っていることがわかっています。

ｘ分後には  のように，５分後とくらべてＢの部分によけいに水が入っています。

Ｂの部分は，(3)で求めた通り，底面積が400 cm^2で，高さは20 cmです。

よってＢの部分の容積は，400×20＝ 8000 (cm^3)です。

１分間に4000 cm^2ずつ水が入るのですから，Ｂの部分に 8000÷4000＝２(分)で水が入ります。

よってｘは，5＋2＝ 7 になります。